

(3) ビワ
イ 殺虫剤

農 薬 名	成 分 名	I R A C コード	適 用 病 害 虫 名										注 意 事 項		
			ナ シ ヒ メ シ ン ク イ	カ イ ガ ラ ム シ 類	ナ シ マ ル カ イ ガ ラ ム シ	ア ブ ラ ム シ 類	ハ ダ ニ 類	ミ カ ン ハ ダ ニ	ビ ワ サ ビ ダ ニ	オ オ タ バ コ ガ	ク ワ カ ミ キ リ				
ア デ ィ オ ン 水 和 剤	ベルメトリン	3A				◎									
ア ド マ イ ヤ ー フ ロ ア ブ ル	イダクプロリト	4A				◎									
ア プ ロ ー ド 水 和 剤	プロフェジン	16		幼											幼:【幼虫に適用】
園 芸 用 キ ン チ ョ ー ル E	ベルメトリン	3A									◎				
オ リ オ ン 水 和 剤 4 0	アネカルフ	1A				◎									
サ ン マ イ ト 水 和 剤	ピリダベン	21A						◎	◎						
ダ ニ エ モ ン フ ロ ア ブ ル	スピロジクロフェン	23							◎						
ダ ニ サ ラ バ フ ロ ア ブ ル	シフルメフェン	25A					◎								
ダ ン ト ツ 水 溶 剤	クロチアジン	4A		◎		◎						類			類:【カキリム類に適用】
テ ル ス タ ー 水 和 剤	ピフェトリン	3A				◎					◎				
パ ダ ン S G 水 溶 剤	カルタップ	14	◎												
バ ロ ッ ク フ ロ ア ブ ル	エトキサゾール	10B							◎						
フ ェ ニ ッ ク ス フ ロ ア ブ ル	フルベンジアミト	28									◎				
マ ブ リ ッ ク 水 和 剤 2 0	フルバリネト	3A				◎									
モ ス ピ ラ ン 顆 粒 水 溶 剤	アセタミプリト	4A		◎		◎									
モ ス ピ ラ ン S L 液 剤	アセタミプリト	4A				◎									
ロ デ ィ ー く ん 煙 顆 粒	フェンプロパトリン	3A				有		有							有:【有袋栽培登録】
ロ デ ィ ー ー 水 和 剤	フェンプロパトリン	3A				◎									
ス ワ ル バ ン カ ー ロ ン グ	スワルスキーカプリダニ							◎							施設栽培での使用に限定
【 マ シ ン 油 乳 剤 】															
ア タ ッ ク オ イ ル	マシン油	UNM, F:NC		◎					◎						
ト モ ノ ー ル S	マシン油	UNM, F:NC		◎											
ハ ー ベ ス ト オ イ ル	マシン油	UNM, F:NC		◎			◎		◎						

ウ 病害虫防除法（ビワ）

（ア）がんしゅ病 *Pseudomonas syringae* pv.*eriobotryae*

（防除のねらい）

6～7月に降雨の多い年は発生が多いので防除回数を増やす。

収穫、せん定及び芽かき作業により生じた傷口から発病することがあるので、作業後はなるべく早い時期に薬剤散布する。

ナシヒメシクイの食入によって病斑が拡大したり、クワカミキリの産卵痕から発病するので、これらの防除も徹底する。

（耕種的防除法）

- （1）新植時には無病苗を選ぶ。
- （2）肥培管理を良くし、樹勢を強くする。
- （3）罹病枝は剪定の時にできるだけ取り除く。

（イ）灰斑病 *Pestalotiopsis neglecta*

Pestalotia eriobotryfolia

（防除のねらい）

越冬した旧葉での春先の発病は春葉伸長期と硬化期に多い。この時期の防除は以後の発病を抑える上から最も重要である。

防除は春葉伸長期～春葉硬化期に2回、夏葉及び秋葉の伸長期に各々1回ずつ行う。また、果実腐敗を防ぐため満開期と落弁期に防除する。

（耕種的防除法）

- （1）落葉はかき集めて園外へ持ち出し、処分する。
- （2）せん定を行い通風、採光をよくする。
- （3）肥培管理を良くし、樹勢を強める。
- （4）収穫期の果実に本病菌による腐敗が出やすいので、果実を傷つけないよう注意する。

（ウ）ごま色斑点病 *Entomosporium eriobotryae*

（防除のねらい）

育苗ほ場では本病の防除が最も大切である。梅雨期に発病が多くなるので、この時期の防除に重点をおく。多湿、排水不良園は発生が多いので対策を講じる。

（耕種的防除法）

- （1）落葉はかき集めて埋没又は園外へ持ち出す。
- （2）育苗ほの排水、通風を良くする。
- （3）敷きわらをして、雨水のはね上がりを防ぐ。

（エ）灰色かび病 *Botrytis cinerea*

（防除のねらい）

露地栽培でも発生するが、特にハウス栽培で多発しやすい。開花から発病し始め、花穂が萎凋・枯死し、花腐れ状となり果実へ感染する。多湿時に発生するので時期を失しないよう防除する。

（耕種的防除法）

- （1）通風採光をよくする。
- （2）ハウス栽培では排水、換気に努め、多湿にならないようにする。

（オ）炭疽病 *Colletotrichum gloeosporioides* Penzig

Colletotrichum acutatum Simmonds ex Simmonds

（防除のねらい）

菌は園内に常時存在し、摘蕾期～開花期にがく孔部から侵入し、果実の熟度が進むと腐敗が始まるため、摘蕾期～落弁期に薬剤防除する。

(耕種的防除法)

- (1) 肥培管理を良くし、樹勢を強くする。
- (2) 防風対策を徹底し、果実への付傷を防ぐ。
- (3) 収穫果実に傷が付かないように丁寧に扱う。

(カ) ナシヒメシンクイ

(防除のねらい)

年に6～7世代発生し、特に7月下旬と9月上旬の発生が多いため、この時期の防除は重要である。

ナシヒメシンクイとがんしゅ病は相互に被害の進展を助長する。したがって、同時防除が最も効果的で、特に病患部の削り取り後の癒合促進は欠かせない。

(耕種的防除法)

主幹の粗皮の下で越冬している幼虫が多いので粗皮削りを行う。削り取った粗皮は土中に埋めるか、園外に持ち出す。

(キ) サンホーゼカイガラムシ (ナシマルカイガラムシ)

(防除のねらい)

日当りの良い園に多く発生する傾向がある。激発するといわゆる“皮はげ症”を引き起こし、樹勢を低下させるので早期防除に努める。削り取った粗皮は土中に埋めるか、園外に持ち出す。

(ク) アブラムシ類

(防除のねらい)

ビワに寄生するアブラムシ類はユキヤナギアブラムシ、ワタアブラムシ、ナシミドリオオアブラムシの3種で、近年、ユキヤナギアブラムシとワタアブラムシの発生が増加している。発生し始めると急激に増加して被害を生じるので発生初期に防除する。

(ケ) ミカンハダニ

(防除のねらい)

露地栽培では6～7月にやや発生が多く、秋季にも発生が目立つ年もある。前年葉から春葉への分散は比較的早い時期から始まり、毛茸の密生した幼葉にも寄生する。

(コ) ビワサビダニ (たてぼや病)

(防除のねらい)

被害痕は苞及び苞の離脱痕から果頂部に向かって褐色の不規則な斑点を生じる。苞内のビワサビダニの加害痕に灰色かび病などの糸状菌が寄生して発生すると言われており、施設栽培を中心に被害が問題になっている。

主因はビワサビダニであり、本虫は出蕾期～開花期にかけて苞中での密度が増加するので、この時期の防除が重要である。

(耕種的防除法)

孫花を早期に除去すると、発生を抑制できる。

(サ) クワカミキリ

(防除のねらい)

成虫は夜間園内に飛来して、1～3cmの枝に産卵する。産卵痕は約10×17mmの長方形で、噛み傷が残る。幼虫は正の走地性を持ち、長径が10～20mmの楕円形の孔道を形成しながら、主幹に向かって食入する。幼虫は、湿った虫糞が出ている排糞孔より下側に食入している。

(物理的防除法)

卵の圧殺又は排糞孔から針金を差し込み幼虫を刺殺する。